
日・英語の指定文と倒置指定文の話題と 焦点の扱い

有元 将剛

Abstract

This paper discusses Focus and Topic of specificational sentences in English (sentences like *John is the Mayor of Cambridge.*) and inverted specificational sentences in English (sentences like *The Mayor of Cambridge is John.*) and also those of Japanese counterparts. In particular, this paper adopts Chomsky's (2008) hypothesis that Edge Features can be inherited from C to T along with Agree feature. It then claims that *John* in *John is the Mayor of Cambridge* is checked within TP by Focus feature inherited from C. In inverted specificational sentence like *The Mayor of Cambridge is John*, *the Mayor of Cambridge* is checked for Topic within TP, and *John* is checked for Focus also within TP but this time by Agree without Movement. Focus of specificational sentences in Japanese (sentences like *Taro ga Shachou da*) is checked within TP like English, but Topic of inverted specificational sentences in Japanese (sentences like *Shachou wa Taro da*) can only be checked in CP since as Mikami (1953) claims, *Taro* in this sentence is followed by unpronounced *Ga*, indicating *Taro* (*Ga*) occupies TP Spec.

1. はじめに

本稿は日・英語の指定文と倒置指定文の話題 (Topic) と焦点 (focus) に

について論じる¹⁾。本稿は Chomsky (2007, 2008) の C から T への素性の継承 (transmission) の考えを採用して説明する。そして英語の指定文と倒置指定文の焦点も話題も TP 内で照合されると主張する。これに対し、日本語の指定文の焦点の照合は TP 内で行われるが、倒置指定文の話題の照合は CP 内で行われると主張する。本稿の構成は以下の通りである。2 節では指定文の特性について論じる。3 節では倒置指定文の特性について論じる。4 節では C から T への素性の継承について述べる。5 節では指定文と倒置指定文の意味について論じる。6 節は英語の指定文と倒置指定文の分裂文について論じる。7 節は日本語の指定文と倒置指定文について論じる。8 節はまとめである。

2. 指定文

Higgins (1973) は、(1a) のような文を predication sentence と呼び、(2a) のような文を specification sentence と呼ぶ。両者の違いの 1 つに、(1a) のような文の場合は、be 動詞の前後の要素を入れ替えた (1b) のような文が非文であるのに対し、(2a) のような文の場合、be 動詞の前後の要素を入れ替えた (2b) のような文は文法的であることがある。

- (1) a. John is honest/a philosopher.
b. *Honest/*A philosopher is John.
- (2) a. John is the Mayor of Cambridge.
b. The Mayor of Cambridge is John.

本稿は、上林 (1988) に従い、predication sentence を「措定文」と呼び、specification sentence を「指定文」と呼ぶ。Higgins (1979) は (2b) のよう

1) 有元 (2011) もコピュラ文と焦点・話題を扱った。本稿は、有元 (2011) の論点をさらに一般化しようとするものである。

な文を *specificational sentence* (指定文) と呼んでいるが, (2a) のような文には特に名称を与えていない。しかし, 上林(1988)は, (3a, b)の文のペアで, (3a) の形の文が基本形と考え, (3a) のような文を「指定文」と呼び, (3b) のような文を「倒置指定文」と呼ぶ。これは, Higgins (1979) の立場と逆である。

- (3) a. 私が社長だ。
 b. 社長は私だ。

有元 (2011) は (2a) のような文を *base specificational sentence* と呼ぶ。(理由は後述。) これは上林 (1988) の立場と軌を一にする。本稿はこの立場を維持しつつも, 上林 (1988) と用語を統一するため, (2a) のような文を単に「指定文」と呼び, (2a) と語順を入れ替えた(理由は後述) (2b) のような文を「倒置指定文」と呼ぶ。

(2a) のような文がより基本形であり, (2b) のような文が基本形とは逆の語順をしていると主張するには根拠が必要である。Heggie (1988) は, コピュラ動詞の主語として機能するものは (4) の階層で左のものであると主張している。さらに Heggie (1988) は一見この規定に従っていない (5) のような文は, *be*動詞の後の要素がCP指定部まで移動された文であると主張する。

- (4) *dexis* → *names* → *definite description* → *indefinite*
 (5) a. The winner is Mary.
 b. [_{CP} The winner_i [_{COMP} is_k] [_{TP} Mary_i [_{TP} *t_k* [_i [_i]]]]

有元 (2011) も (6) を主張している。(7a) と (7b) の *the Mayor of Cambridge* は, Declerck (1983) も述べるように, 「弱い意味」でしか指示的 (*weakly referential*) であり得ない。話者は, (7a, b) で *the Mayor of Cambridge* という

表現だけでは、その指示対象を特定することはできない。John と結びつけられることで初めて、その指示対象が特定できる。その意味で (7a, b) の the Mayor of Cambridge は、(8) の文における完全に指示的である the Mayor of Cambridge とは対照をなす。(6) の主張に従えば、(7a, b) と小節構造では John が主語位置にあることになる。そうすると (7a) では小節構造の語順が維持されているのに対し、(7b) では小節構造の語順とは「倒置」されていることになる。

- (6) 主語と叙述の関係を示す小節構造で 2 つの DP がある場合、完全に指示的な DP が主語の位置を占める。
- (7) a. John is the Mayor of Cambridge. (= (2a))
b. The Mayor of Cambridge is John. (= (2b))
- (8) The Mayor of Cambridge visited Kyoto.

Heggie (1988) の (4) も有元 (2011) の (6) も概念的な規定である。概念的な規定だけでは不十分であり、他の種類の論拠も必要となる。(7a) と (7b) のどちらが倒置されたかについての議論に関わるもっとも重要な言語事実は Williams (1983, 1997) あるいは Moro (1997) の指摘する、ECM 構造と小節構造における指定文・倒置指定文の生起可能性である。(9) のように、ECM 構文においては (2a) の語順も (2b) の語順も許される。しかし (10) で示すように、小節構造では (2a) の語順と同じ語順のものは許されるが、(2b) の語順のものは許されない。

- (9) a. I consider John to be the Mayor.
b. I consider the Mayor to be John.
- (10) a. I consider John the Mayor.
b. *I consider the Mayor John.

この事実、ECM 構文は TP であり、小節構造は TP ではなくて SC (Small Clause) であるという構造の違いに帰されるべきとするのがもっとも自然な考えであろう。そして、しばしば指摘されるように、VP 内主語仮説を採用すれば TP の指定部は空であり、その結果 TP には移動が関わり、SC には空の指定部がないので、移動が関わらないということが両者の一番の違いということになる。すなわち、移動が関わる ECM 構文で、2つの DP のどちらもが TP 指定部へ移動することが可能なら、(9a) と (9b) の両方の語順が可能である。(移動のメカニズムならびに局所性の問題については 5 節で取り上げる。) これに対し、移動のない SC では基底構造で許される語順だけが許される。しかし、この考えで一番重要なのは、2つの DP があるコピュラ文で、どちらの DP が小節の主語位置に来て、どちらの DP が小節構造の述語位置に来るかについての一般論である。

一般に述語が主語などその項に意味役割 (θ 役割) を付与する。このことを念頭に、(6) をさらに検討する。完全に指示的な DP が主語位置来到することは、もしもう 1 つの DP が弱い意味で指示的である場合、完全に指示的な DP は小節の述語位置に来ないということである。また、弱い意味で指示的な DP は小節の主語位置来到ことはなく、そしてそれは小節の述語位置来到ということである。弱い意味で指示的な DP はそれ自体で指示対象を決めることはできない。そしてその指示対象は同定を通して認可されることが考えられる。(11) のような文において、形容詞 *intelligent* は、単体では飽和(saturate)されるべき Theme という意味役割を持っている。そして、(11a, b) の小節構造において主語位置にある John に Theme を付与して、Theme は飽和される。

- (11) a. [_{TP} [_{VP} be [_{SC} John [_{AP} intelligent]]]]
 b. I consider [_{SC} John [_{AP} intelligent]]

指定文における弱い意味で指示的である the Mayor of Cambridge などの DP も飽和されるべき「指示対象」という素性があり、それが John と同定され、飽和されると考えると、何故小節構造の述語の位置に完全に指示的な DP が来ることができないかが説明出来る。(そのメカニズムについては後で触れる。)

- (12) a. [_{TP} [be [_{SC} John [_{DP} the Mayor of Cambridge]]]]
b. I consider [_{SC} John [_{DP} the Mayor of Cambridge]]

指示の同定が指定文の本質であると思われる。Moro (1997) は意味役割の観点で (10a) と (10b) の対比を説明する。しかし、指示の同定と意味役割の付与が同一であるとは言いきれないように思われる。

なお、Rothstein (1995) は (13a) のような措定文と (13b) のような倒置指定文の、ECM 構文と小節構文における統語的振る舞いについて議論している。

- (13) a. The winner is a good runner.
b. The winner is Mary.
(14) a. I consider the winner to be a good runner.
b. I consider the winner to be Mary.
(15) a. I consider the winner a good runner.
b. *I consider the winner Mary.

しかし Rothstein (1995) は (13b) のような倒置指定文と (16) のような指定文とを比べて議論していない。特に、(15b) と (18) の対比について述べていないので、Rothstein (1995) の主張は本論の論点には寄与しない。

- (16) Mary is the winner.
- (17) I consider Mary to be the winner.
- (18) I consider Mary the winner.

3. 倒置指定文

以上のように、倒置指定文は、基底構造における小節の述語位置にある DP が倒置されたものであると考えることができる。ではどの位置に倒置されるのであろうか。また、どのようなメカニズムで倒置されるのであろうか。前者について、上述のように Heggie (1988) は、(19a) (= (5a)) の the winner は、(19b) (= (5b)) のように CP 指定部に倒置されると主張する。

- (19) a. The winner is Mary.
- b. $[_{CP} \text{The winner}_i [_{COMP} \text{is}_k] [_{TP} \text{Mary}_i [_{T'} t_k [_t_i [t_i]]]]]$

Heggie の主張で重要な点は、be 動詞が T の位置から C の位置へ移動していることである。Mary は TP の指定部にあるので、(19a) の語順を生みだすためには、is は TP 指定部にある Mary の前に出る必要がある。しかし、この考えは、Mikkelsen (2005) が述べているように、文が be 動詞の他に法助動詞を持つ場合、破綻する。正しい語順は (20a) である。そしてそれは指定文と can と be に関して同じ語順である。(20b) の指定文では can は T 位置にある。倒置し指定文で T の要素が C に移動するのであれば、(21) の語順を予測する。しかし、(21) は非文である。

- (20) a. The winner can be Mary.
- b. Mary can be the winner.

- (21) *The winner can Mary be.

さらに倒置指定文で倒置された要素は、(22) のように NP 移動できる。このことも倒置された要素は CP 指定部にはないことを示す。そして、(22) のように subject-to-subject raising を受けるということは、the winner は移動前には TP 指定部にあったことを示している。

- (22) The winner seems to be Mary.

Heggie (1988) は倒置指定文で、倒置された NP が CP の指定部にある論拠として、(23)、(24) のような指定文・倒置指定文の分裂文についての言語事実を挙げている。

- (23) a. John Smith is my doctor.
b. It's John Smith that is my doctor.
(24) a. My doctor is John Smith.
b. *It's my doctor that is John Smith.

(23b) のように、指定文の主語は分裂文の焦点位置に生起できる。これに対し、倒置指定文の主語は分裂文の焦点位置に生起できない。Heggie (1988) はこの事実を倒置指定文の「主語」は CP 指定文にあるので、分裂文においては (25) のように二重詰めコンプフィルターに違反すると主張する。

- (25) a. It is [_{CP} my doctor_i [_{CP} that [_{TP} t_i is OP is my doctor]]]
b. It is [_{CP} my doctor_i [_{CP}[OP_i + that] [_{TP} t_i is t_i is my doctor]]]

しかし、上で述べたように倒置指定文において倒置された NP が CP 指定

部がないとしたら、(24b) が非文であることを二重詰めコンプフィルターで説明することはできない。すなわち、(24b) が非文であることが課題として残る、本稿は (24b) のような倒置指定文の分裂文が不可能であることを倒置指定文の特性との兼ね合いで説明することを試みる。そのため、まず倒置指定文がどのように派生されるか見る。

4. C から T への素性の継承

Chomsky (2007, 2008) は、T はそれ自体、一致素性を持たず、一致素性が C から T へ継承されると主張する。さらに、Chomsky は、C は Rizzi (1997) の Left Periphery の要素の省略と考える。Rizzi (1997) は C は (26) のような構造をしていると主張する。

(26) ... Force ... (Topic) ... (Focus) ... Fin IP

一致素性は T に継承されるので、一致素性の照合は TP で行われることになる。また、Topic, Focus などを Chomsky は先端素性 (Edge Feature) と呼ぶが、先端素性の照合は CP で行われることになる。

しかし、Chomsky (2008: 157) は先端素性も一致素性ととも C から T へ継承される可能性について述べている。もしこの考えが正しいとすると、先端素性が C から T に継承された場合は、先端素性の照合は TP で行われることになる。この考えを基に指定文と倒置指定文の派生を考える。

5. 指定文と倒置指定文の意味

まず指定文を考える。Higgins (1973) は指定文の形をしている (27a) (= (2a)) のような文は、John の性質を示す措定文としても使用できると述べて

いる。そして、この場合は (27b) のように、冠詞の the は省略できる。(これは、伝統文法で官職の the の省略と呼ばれる現象である。)

- (27) a. John is the Mayor of Cambridge.
b. John is Mayor of Cambridge.

(27a) が措定文の場合、冠詞の the の省略が可能であるということは、冠詞の the の指示性が弱まっていると考えられる。措定文の場合は, John と (the) Mayor of Cambridge の指示の同一を述べるというより, John が (the) Mayor of Cambridge という属性を持つということを示す。もし、ケンブリッジ市長が二人いることが制度上可能であれば、措定文である (27a) を言った後で、(28) を続けて言うことができる。これに対し、指定文としての (27a) では the の省略は不可能である。そして、この解釈では、ケンブリッジ市長が二人いることは想定されず、続けて (28) のように言うことはできない。

- (28) Tom is also Mayor of Cambridge.

この2つの用法は、久野(1973)あるいは上林(1987)が論じている日本語の措定文と指定文と同じ性質を持つ。(29a) は措定文であり、「太郎」が持つ性質を示す。(29b) は指定文であり、「今話題になっている人物の中では太郎だけが学生である」ということを示す。(久野(1973)は「総記」という用語を使う。)

- (29) a. 太郎は学生だ。
b. 太郎が学生だ。

指定文の解釈の (27a) で今話題になっている人物の中で John だけが the

Mayor of Cambridge であるという意味であることは、John が焦点であることを示す。(30a) に対する答えは (31a) あるいは (31b) である。(Mikkelsen (2005) 参照。) この場合、wh 疑問文の答えとなっており、(31b) の JOHN は焦点であることを示す。

(30) Who is the winner?

(31) a. The winner is JOHN.

b. JOHN is the winner.

指定文としての (27a) ((32) として再録。) で、John は TP 指定部位置を占めると述べた。しかし John は焦点である。焦点など先端素性は C に属する。しかし、上述の Chomsky (2008) の C から T への先端素性の継承の可能性を考えると、焦点は TP 内に存在すると考えることが可能になる。(32) は基底構造として (33) を持つ。Focus と ϕ が C から T へ継承され、(34a) になる。

(32) John is the Mayor of Cambridge.

(33) [_{CP} Focus ϕ [_{TP} T [_{VP} be [_{SC} John [_{DP} the Mayor of Cambridge]]]]]

(34) a. [_{CP} [_{TP} T{Focus ϕ } [_{VP} be [_{SC} John [_{DP} the Mayor of Cambridge]]]]]

b. [_{CP} [_{TP} John_i T{Focus ϕ } [_{VP} be [_{SC} _i [_{DP} the Mayor of Cambridge]]]]]

T は Focus と ϕ を持っており、SC の指定部位置にある John を TP 指定部に引き寄せる。(34b) T の一致素性が照合され、John の格が照合される。さらに John は Focus 要素となる。一度の移動で 2 つの素性が照合されるが、これは (35) のような主格の wh 疑問文について Chomsky (2007, 2008) が論じていることと並行的である。Chomsky は、(35) は次のように派生されると主張する。まず v^* フェイズで解釈されていない素性がチェックされる。

次に、C の先端素性と一致素性が v^* 指定部にある who を探す。C の一致素性は T に継承され、T は who を TP 指定部に上昇させる。そして C の先端素性は who を CP 指定部に上昇させる。(36) のような非対格構文においても、 v^* フェイズがないだけで実質同じ派生がされる。

- (35) a. Who saw John?
 b. C [T [who [v^* [see John]]]]
 c. Who_i [C [who_i [T [who_k v^* [see John]]]]]
- (36) a. Who arrived?
 b. C [T [v [arrive]]]
 c. Who_i [C [who_i [T [v [arrive who_k]]]]]

主格の Wh 疑問文の場合は、先端素性は C にあり、一致素性は T にあるが、指定文の場合は、どちらも T にあるという違いがあるが、1 つの移動で 2 つの素性が照合されるという点では同じである²⁾。

2) (35) で先端素性は C にある。従って、(37) のような指定文においても先端素性が C にあるのではないかと、との疑問が出るかもしれない。しかし (35) のような主語が wh 句の場合と (37) のような指定文では性質が異なる。主語が wh 句の場合は、先端要素が C になくなくてはならないことは、(i) あるいは (ii) のような ECM/Raising 構文における wh 句の振る舞いを見れば分かる。

- (i) *John believes [_{TP} who to be [_{SC} / honest]].
 (ii) Who seems [_{TP} / to be [_{SC} / honest]].

ECM 補文は CP ではなく IP である。ここに wh 句が生起できず、(i) が非文法的であるのは wh 句に関わる先端素性が C にあることを示す。また、(ii) で w 句が Raising 構文の指定部に立ち寄ることは、この移動が EPP のためであることを示す。これに対し、指定文においても倒置指定文においても DP が ECM 補文の指定部に生起できるということは、焦点に関わる先端素性が C ではなく T にあることを示す。

- (iii) I believe [_{TP} John to be [_{SC} / the Mayor of Cambridge]].
 (iv) I believe [_{TP} the Mayor of Cambridge to be [_{SC} John]].

次に措定文としての (27a) ((37) として再録。) の派生を見る。(37) は (38) の構造を持つ。今回は Focus を持たない。一致素性が C から T に継承されると (39) になる。一致素性が John を引き寄せて、一致素性の照合がなされる。

(37) John is the Mayor of Cambridge.

(38) $[_{CP} \phi [_{TP} T [_{VP} be [_{SC} John [the Mayor of Cambridge]]]]]$

(39) $[_{CP} [_{TP} T \{\phi\} [_{VP} be [_{SC} John [the Mayor of Cambridge]]]]]$

指定文としての (27a) と措定文としての (27a) の違いは、前者が指示の同定であり、John だけについて述べるのに対し、後者は指示の同定ではなく、また John だけについて述べるのではない。2 節で弱い意味で指示的な DP には「指示対象」という素性があり、それが John と同定されると述べた。同定されるものは、総記の意味を持つ。「指示対象」が同定されるものは Focus を持つものであると考えることができる。従って、指定文の場合、John は Focus を持つ³⁾。

3) Chomsky (2008 : 157) は C から T への先端素性の継承が、あるフェイズ内のすべての T に拡張する可能性について述べている。この考えによれば、(9a) ((i) として再録) は (ii) の構造を持つ。ECM の TP には主文の C から ϕ が継承される。John は EPP を満たすために ECM の TP の指定部に引き寄せられると同時に、Focus 素性の照合も行われる。

(i) I consider John to be the Mayor.

(ii) $[_{CP} [_{IP} I consider [_{TP} John_i [_T to \{Focus\} [be [_{SC}_i the Mayor]]]]]]]$

(10a) ((iii) として再録。) のような SC 構造の場合は、T は存在しない。しかし、SC の場合も ECM 構文の場合や主文の場合と同じように主語—叙述の関係が存在する。この場合、小節の主要部として Bowers (1993) の pr (predication) があると考えられる。そして、主語—叙述の関係を持つ pr にも Focus が主文の C から Focus が継承されると (iv) になる。

(iii) I consider John the Mayor.

次に (2b) ((40) として再録。) のような倒置指定文を考えよう。(30) および (31) ((41) および (42) として再録。) のように, この場合, the Mayor of Cambridge は Topic を示す。

(40) The Mayor of Cambridge is John.

(41) Who is the winner?

(42) a. The winner is JOHN.

b. JOHN is the winner.

(40) の基底構造は (43a) である。C から T へ Topic 素性が継承されたとしよう。(43b) となる。次に the Mayor of Cambridge が⁸ TP 指定部に引き寄せられる。

- (43) a. $[_{CP} \text{Topic } \phi [_{TP} T [_{VP} \text{be} [_{SC} \text{John} [_{DP} \text{the Mayor of Cambridge}]]]]]$
b. $[_{CP} [_{TP} T\{\text{Topic } \phi\} [_{VP} \text{be} [_{SC} \text{John} [_{DP} \text{the Mayor of Cambridge}]]]]]$
c. $[_{CP} [_{TP} [_{DP} \text{the Mayor of Cambridge}]_i T\{\text{Topic } \phi\} [_{VP} \text{be} [_{SC} \text{John } t_i]]]]]$

TP の指定部に引き寄せられた the Mayor of Cambridge は Topic の性質を持つ。次に一致素性について考えよう。指示的ではない DP は, (44) のように TP 指定部に生起出来ない。

(44) *A philosopher is John.

倒置指定文の TP 指定部にある the Mayor of Cambridge は, 上述のように弱い意味で指示的である。TP 指定部に生起できるが⁹, 指示的な DP とは違う

(iv) $[_{CP} [_{IP} \text{I consider} [_{SC} \text{John} [_{pr}\{\text{Focus}\} [\text{the Mayor}]]]]]$

性質を持つと考えられる。それは John という格を持った DP の存在である。状況は場所句倒置文と並行的であるように思われる。

場所句倒置文で倒置された場所句は Bresnan (1994) が指摘するように、上昇構文で上昇できる。従って、倒置された場所句は TP 指定部を占める⁴⁾。しかし、(45a, b) で an entire army of ants と a cathedral の格が照合されていないように見える。

- (45) a. [Over my windowsill] seems [_{TP} *t* [to have crawled an entire army of ants]]. (Bresnan 1994)
- b. [In these villages] are likely [_{TP} *t* [to be located a cathedral]]. (*ibid.*)

この点に関し、Branigan (2000) は興味深い議論を展開している。Branigan (2000) は、(46a) のような ECM 構文の TP 指定部にある DP が TP の外まで束縛するという Lasnik and Saito (1991) の指摘に言及した後、場所倒置文の ECM 構造で、下にある DP が TP の外まで束縛すると述べ、DP かあるいは DP の素性が LF で照応形を束縛できる位置まで移動すると述べる。

- (46) a. Perry proved [Jill and Tony to have lied] during each other's trials.
(Lasnik and Saito 1991)
- b. *Perry proved that [Jill and Tony lied] during each other's trials.
- (47) a. The photos [_{VP} showed [_{TP} behind this very hedge to have been hiding Jill and Tony]_i] during each other's trials].
- b. Pam [_{VP} proved [_{TP} in this bed to have slept Washington and Lincoln]_i] in each other's biographies].

4) Chomsky (2008) は場所倒置文においては、TP 指定部に空の冗語があると主張する。しかし、この考えでは (45) のような上昇構文における場所句の振る舞いがどのように説明できるか明らかでない。

- (48) a. ??The photos [_{VP} showed that [_{TP} behind this very hedge had been hiding Jill and Tony_i] during each other_i's trials].
b. ??Pam [_{VP} proved that [_{TP} in this bed had slept Washington and Lincoln_j] in each other_i's biographies].

この LF 移動の結果, DP が移動したと考えられた場合は, (49a) になり, DP の素性が移動したと考えられた場合は (49b) になると Branigan は述べる。

- (49) a. the photos [Jill and Tony_i [_{VP} showed [_{TP} behind this very hedge to have been hiding *t*] during each other_i's trials]]
b. the photos [_{VP} FF(Jill and Tony)_i -showed [_{TP} behind this very hedge to have been hiding Jill and Tony_j] during each other_i's trials]]

この Branigan の提案を今の枠組みに翻訳すると, ECM 動詞による長距離の一致 (移動なしでの照合) ということになる。場所倒置構文で場所句でない DP は, 移動はしないが TP 指定部にいるように判断される。

同じことが倒置指定文でも言える。まず指定文である (50a) を考えよう。John と Mary は each other の先行詞になることができる。次に倒置指定文である (50b) を考えよう。この場合も John と Mary は each other の先行詞になることができる。

- (50) a. They proved John and Mary to be the mayors of Cambridge and Oxford during each other's trials.
b. They proved the mayors of Cambridge and Oxford to be John and Mary during each other's trials.

倒置指定文でコピュラの後にある DP も TP も顕在的な移動はしないが, 素

性の照合を受ける。これは、(51) のような *there* 構文が持つ性質と同じである⁵⁾。

- (51) *There is a unicorn in the room.*

倒置指定文のコピュラの後 DP も、移動はしないが TP での照合を受けると考え、そしてこの場合 Focus 素性が C から T へ継承されていると考え、倒置指定文のコピュラの後 DP も Focus になる。

次に局所性の問題を考えよう。移動前の構造が (52) であるとしたら、倒置指定文では TP 指定部により遠い DP が移動することになる。

- (52) $[_{CP} [_{TP} T\{Topic\ \phi\} [_{VP} be\ [_{SC} John\ [_{DP} the\ Mayor\ of\ Cambridge]]]]]$

この点を考える際に重要となるのは、コピュラ文は非対格動詞である *be* を含むということである。非対格動詞は *v** を含まない。2つの DP は同じフェイズに属する。場所句倒置構文においても動詞は (53) のように非対格動詞である⁶⁾。

- (53) a. *Out of the mist appeared a man with a hat.*
 b. *To the village came the man from the north.*

Chomsky (2008) は多重疑問文における優位条件はないと述べている。そして英語のように優位条件が見られる言語については別の説明が必要と述べて

5) しかし *there* 構文においては、束縛に関し、(47)、(50b) とは特性が異なる。この点に関しては、有元 (2011) を参照のこと。

6) 場所倒置構文で、一見非対格動詞ではないように見える場合については有元 (2011) を参照のこと。

いる。

- (54) a. Who saw what?
b. *What did who see?

この考えを指定文と倒置指定文あるいは場所句倒置文にあてはめると、2つのDPが同じフェイズの要素である限り、どちらのDPが移動してもよいことになる。従って、局所性の問題は生じないことになる。さらに、何故指定文・倒置指定文と場所句倒置文だけで2つの要素が入れ替えが可能で、他の場合は2つの要素が入れ替わらないか、についてもフェイズの観点から説明できる。例えば、(55a)のMaryがTopicであっても(55b)にはならない。(55a)と(55b)ではまったく違う意味である。これに対し、(56)と(57)においては、それぞれaとbは基本的な意味は同じで、Topic/Focusが異なるだけである。そして、これが可能であるのは非対格動詞を含む指定文・倒置指定文と場所句倒置文だけである。

- (55) a. John loves Mary.
b. Mary loves John.
(56) a. John is the Mayor of Cambridge.
b. The Mayor of Cambridge is John.
(57) a. A man with a hat appeared out of the mist.
b. Out of the mist appeared a man with a hat.

以上、TopicがCからTに継承された場合を論じた。次に、TopicがCに留まった場合を考える。基底構造が(58a)であったとしよう。そして、(58b)のように ϕ とFocusがCからTに継承されて、TopicがCに留まったとしよう。TP内で起こるのはJohnがTP指定部に引き寄せられ、 ϕ とFocusの照合がな

される。John は Focus の解釈を受ける。Topic の照合は CP で行われる。[DP the Mayor of Cambridge] が CP 指定部に引き寄せられ Topic の解釈を受ける。派生された文は (59) である。

- (58) a. [_{CP} Topic Focus ϕ [_{TP} T [_{VP} be [_{SC} John [_{DP} the Mayor of Cambridge]]]]]
 b. [_{CP} Topic [_{TP} T{Focus ϕ } [_{VP} be [_{SC} John [_{DP} the Mayor of Cambridge]]]]]
 c. [_{CP} Topic [_{TP} John_i T{Focus ϕ } [_{VP} be [_{SC} t_i [_{DP} the Mayor of Cambridge]]]]]
 (59) The Mayor of Cambridge, John is.

次に倒置指定文で同じようなことが起こった場合を考えよう。(61) は非文である。

- (60) The Mayor of Cambridge is John.
 (61) *John, the Mayor of Cambridge is.

本稿は倒置指定文で TP 指定部にある DP ((60) の the Mayor of Cambridge) は Topic であると主張してきた。Topic が C から T に継承され、TP 内で Topic が照合されている。しかるに (61) では John が Topic であることを示している。1 つの文に Topic が 2 つあるので、非文になるのである。(Topic は TP 内で既に the Mayor of Cambridge と照合されているので、CP 内にはないので、John は CP に引き寄せられることができない。)

6. 指定文・倒置指定文の分裂文

同じ議論が指定文・倒置指定文の分裂文についても言える。上記の Heggie (1988) の指定文・倒置指定文の分裂文の言語事実をもう一度示す。

- (62) a. John Smith is my doctor.
 b. It's John Smith that is my doctor.
- (63) a. My doctor is John Smith.
 b. *It's my doctor that is John Smith.

分裂文でコピュラの後の要素は Focus であると言われている。Hiraiwa and Ishihara (2002) は日本語の分裂文を「のだ構文」から、焦点要素を FocusP の指定部に上昇させ、残りの要素を TopP の指定部に上昇させて派生する。分裂文と疑似分裂文とでは機能は同じではないが、Boeckz (2007) は、(64) のような疑似分裂文は、(65) で示す派生をたどると主張する。(60a) の FiniteP 中の important が (65b) のように、FocusP へと引き上げられる。次に (65b) の $[_{\text{FinP}} \text{John is } t_i]$ が (65c) のように TopP に引き上げられる。さらにその $[_{\text{FinP}} \text{John is } t_i]$ の痕跡 t_i が活性化され what になる。そして what が (65e) のように Wh 移動される。最後に Top の主要部に be が挿入されて (65f) が派生される。

- (64) What John is is important.
- (65) a. $[_{\text{FinP}} \text{John is important}]$
 b. $[_{\text{FocusP}} \text{important}_i [_{\text{FinP}} \text{John is } t_i]]$
 c. $[_{\text{TopP}} [_{\text{FinP}} \text{John is } t_i] [_{\text{FocusP}} \text{important}_i [_{\text{FinP}} t_i]]]$
 d. $[_{\text{TopP}} [_{\text{FinP}} \text{John is } \textit{what}_i] [_{\text{FocusP}} \text{important}_i [_{\text{FinP}} t_i]]]$
 e. $[_{\text{TopP}} [\textit{what}_k [_{\text{FinP}} \text{John is } t_k]] [_{\text{FocusP}} \text{important}_i [_{\text{FinP}} t_i]]]$

f. $[_{TopP} [what_k [_{FinP} John\ is\ t_k]]_j [_{Top'} is\ [_{FocP} important_t [_{FinP} t]]]]$

分裂文でコピュラの後の要素が Focus であるとする。(62a) の John Smith は Focus であるので、分裂文の Focus の位置に来ることができる。しかし (62b) の my doctor は Topic である。Topic であるものが Focus になることはできない。従って、倒置指定文では TP 指定部にある DP は分裂文の焦点位置に来ることはできない。

7. 日本語の指定文と倒置指定文

以上、英語の指定文と倒置指定文について論じてきた。次に日本語の指定文と倒置指定文について述べる。2 節で述べたように、上林 (1988) は (66a, b) の文のペアで、(66a) のような文を「指定文」と呼び、(66b) のような文を「倒置指定文」と呼ぶ。

- (66) a. 私が社長だ。
b. 社長は私だ。

この構文について、三上 (1953) は (66b) は (67) のような構造をしていると指摘している。

- (67) 社長は私ガだ。

すなわち、(66b) にはガはないが、「私」はガ格を持つという指摘である。すなわち、(66b) は (66a) の「社長」が Topic になった形と言える。(66a) は総記の意味を持ち、英語と同じように、Focus が C から T に継承されて、

「私」が TP 指定部に移動して、Focus になったと考えられる⁷⁾。(66a) で「私」が CP 内にあるという証拠はない⁸⁾。これに対し、(66b) の「社長」はガ格を持つ「私」の前にあり、CP 内にあると考えられる。(66a, b) は次のような構造を持つ。(66a) は ϕ と Focus が C から T に継承され、「私」が Focus を受ける。(66b) は (69a) の構造を持ち、「私」が TP 指定部に進み、 ϕ と Focus の照合がなされる。その後、「社長」が CP 指定部に進み、Topic の照合がなされる。

- (68) a. [_{CP} [_{TP} [_{VP} 私 社長 だ] T] C ϕ Focus]
 b. [_{CP} [_{TP} [_{VP} 私 社長 だ] T { ϕ Focus}] C]
 c. [_{CP} [_{TP} 私が_i [_{VP} t_i 社長 だ] T { ϕ Focus}] C]
- (69) a. [_{CP} [_{TP} [_{VP} 私 社長 だ] T] C ϕ Focus Topic]
 b. [_{CP} [_{TP} [_{VP} 私 社長 だ] T { ϕ Focus}] C Topic]
 c. [_{CP} [_{TP} 私_i (が_i) [_{VP} t_i 社長 だ] T { ϕ Focus}] C Topic]
 d. [_{CP} 社長_j は [_{TP} 私 (が_i)_i [_{VP} t_i t_i だ] T { ϕ Focus}] C Topic]

次に日本語の指定文と倒置指定文の分裂文を考えよう。指定文である (70a) に対応する分裂文は (70b) のように容認可能である。これに対し、倒置指定文である (71a) に対応する分裂文は (71b) のように容認不可能である。

- (70) a. ジョンが社長である。
 b. 社長であるのはジョンである。

7) 「だ」は「である」から派生されるが、便宜上簡便に示してある。

8) 「雨が降っている。」のように「中立」の「が」を含む文は、(68a) から Focus を除いた構造をしている。「雨」は Focus を受けず、一致素性の照合だけが行われる。なお、「ジョンは市長である。」のような措定文の扱いについては稿を改めたい。

- (71) a. 社長はジョンである。
b. *ジョンであるのは社長である。

指定文の (70a) の「ジョン」は Focus であり、分裂文のコピュラの前の DP が Focus であるとする、その位置を占めることができる。これに対し、倒置指定文の (70b) の「社長」は Topic である。従って、分裂文のコピュラの前の位置に生起することはできない⁹⁾。

8. まとめ

以上、英語と日本語の指定文と倒置指定文を見てきた。指定文においては英語も日本語も Focus は TP 内で照合されると主張してきた。一方、英語の倒置指定文では Topic が TP 内で照合されるが、このオプションは日本語にはない。日本語では Topic は CP 内で照合される。すなわち、英語では TP 内で Topic も Focus も照合されるが、日本語では Topic の照合は TP 内では行われない。この英語と日本語の Topic の照合に関する相違は、日本語には Topic のためのマーカーである「は」があるのに対し、英語には Topic のためのマーカーがないからであると考えられる。

9) Higgins (1973) は (i), (ii) のような文を identificational sentence (同定文) と呼ぶ。同定文と本稿で述べて来た指定文・倒置指定文とは異なる性質を持つ。砂川 (1996) も (iii) のような「A が B だ。」の文を扱っている。

- (i) That man is Mary's brother.
(ii) The man over there is the Mayor of Cambridge.
(iii) ご紹介しましょう。こちらが田中さんです。それからその横にいるのが高橋さんです。

同定文については別の機会に論じたい。

参考文献

- 有元將剛 (2011) 「英語の Copular Clauses 再考」『アカデミア』(文学・語学編) 第 89 号, 97-126, 南山大学, 名古屋.
- Boeckz, Cedric. (2007) “Pseudoclefts: A Full Account.” In *Linguistic Theory and South Asian Languages: Essays in Honour of K. A. Jayaseelan*, ed. by Josef Bayer et al. 33-40, John Benjamin, Amsterdam.
- Bowers, John. (1993) “The Syntax of Predication.” *Linguistic Inquiry*, 24: 591-656.
- Branigan, Philip (2000) “Binding Effects with Covert Movement.” *Linguistic Inquiry* 31: 553-557.
- Bresnan, Joan. (1994) “Locative Inversion and the Architecture of UG.” *Language* 70: 72 - 131.
- Chomsky, Noam. (2007) “Approaching UG from Below.” In *Interfaces+Recursion=Language?: Chomsky’s Minimalism and the View from Syntax-Semantics*. ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam. (2008) “On Phases.” In *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honoar of Jean-Roger Vergnaud*. ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Declerck, Renaat (1983) “‘It is Mr. Y’ or ‘He is Mr. Y?’” *Lingua* 59, 209-246.
- Heggie, Lorie A. (1988) *The Syntax of Copular Clauses*. Ph. D. dissertation, USC.
- Hiraiwa, Ken, and Shinichiro Ishihara. 2002. “Missing links: Cleft, sluicing, and *no da* construction in Japanese.” *MIT Working Papers in Linguistics* 43: 35-54. Cambridge, MA.
- Higgins, Francis Roger. (1973) *The Pseudo-Cleft Construction in English*. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA. Reprinted as (1979) *The Pseudo-Cleft Construction in English*. Garland, New York.
- 上林洋三. (1987) 「措定文と指定文——ハとガの一面——」『文藝言語研究 言語篇』14 卷 56-74 ページ 筑波大学.
- 久野暉. (1973) 『日本文法研究』大修館, 東京.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1991) “On the Subject of Infinitives.” *CLS* 27, 324 - 343.
- 三上章. (1953) 『現代語法序説』刀江書院, 東京.
- Mikkelsen, Line. (2005) *Copular Clauses: Specification, Predication and Equation*. John Benjamin,

Amsterdam.

Moro, Andorea. (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*. Cambridge University Press, Cambridge.

Rizzi, Luigi. (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery.” In *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.

Rothstein, Susan. (1995) “Small Clauses and Copular Constructions.” *Syntax and Semantics: Small Clauses Vol. 28*, ed. by Anna Cardinaletti and Maria Teresa Guasti, Academic Press, San Diego, CL.

砂川有里子 (1996) 「日本語コピュラ文の類型と機能——記述文と同定文——」
上田功(他)(編)『言語探求の領域——小泉保博士古希記念論文集』261–273 頁.
大学書林.

Williams, Edwin. (1983) “Semantic vs. Syntactic Categories.” *Linguistics and Philosophy* 6: 423–446.

Williams, Edwin. (1997) “Lexical and Syntactical Complex Predicates.” In *Complex Predicates*, ed. by A. Alsina, J. Bresnan, and P. Sells, 13–28, Center for the Study of Language and Information, Stanford, California.